

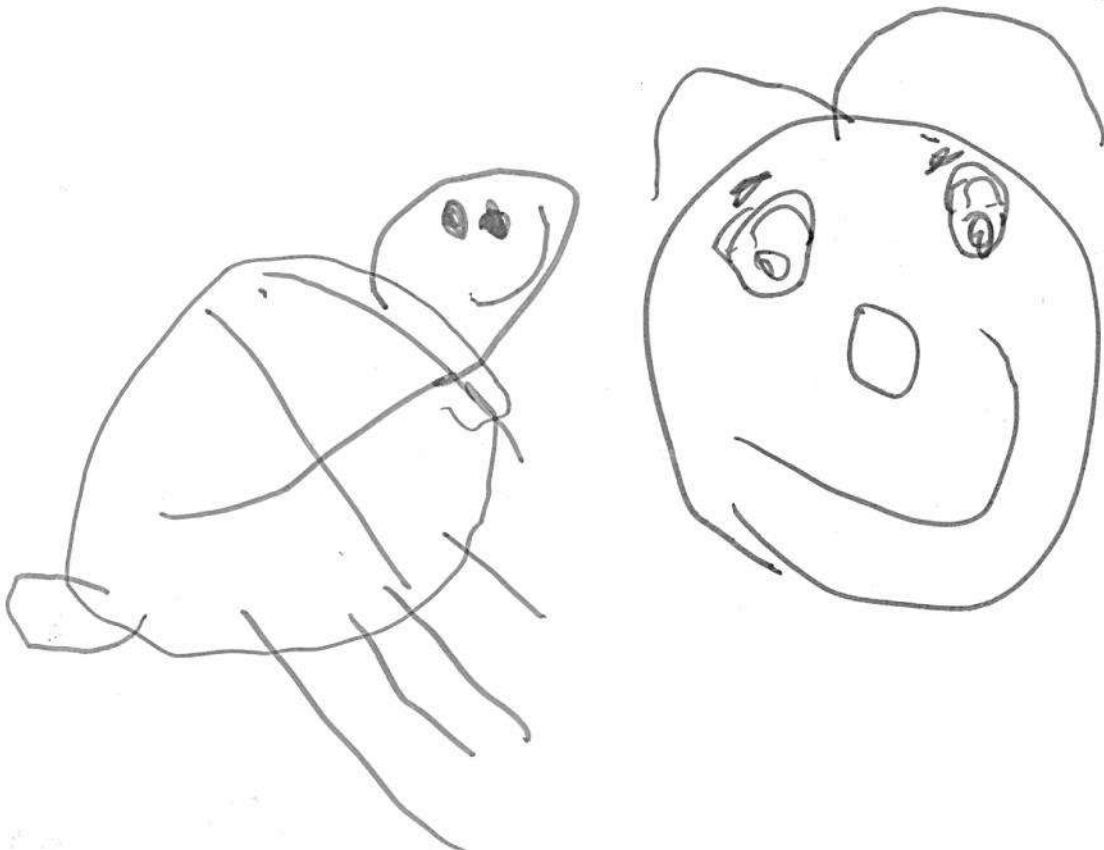


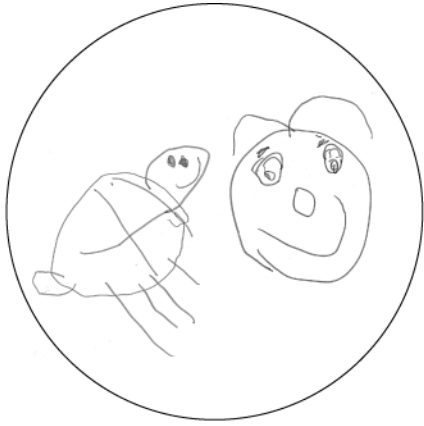
Marine Turtler

マリンターラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第23号





表紙の絵 城 彩乃さま

今号の表紙の絵は香川県にお住いの4歳の城彩乃ちゃんのイラストです。2歳の時に水族館でカメを見て以来カメが大好きになり、日和佐ウミガメ博物館へ行ったり、近くのペットショップで陸ガメを見たりと、毎日「カメカメ」言っているそうです。今回の絵の題名は「あやとかめたろう」との事です。彩乃ちゃんのお母さんはカメの研究者になってほしいようですが、保育園では「将来の夢はカメになることです」と言っているそうです。かわいいイラストと素敵なお話をありがとうございました。またイラストお待ちしております！

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。（仕上がりはモノクロになります。）
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリン・タートル（Marine Turtle）は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思います。


**Marine
Turtle**

Contents

ウミガメ基礎講座 23	「産まれた直後から」 岡本慶	3P
第27回 日本ウミガメ会議 in 室戸のご報告	室戸基地 田中優衣	5P
第28回 日本ウミガメ会議 国際会議のご案内		7P
事務局長挨拶	松宮 賢佑	8P
各地からの報告		
琉球大学ウミガメ研究会の紹介	九代目会長 吉田拓海	9P
宮崎野生動物研究会の活動紹介	岩切康二	11P
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪～近藤康男さんを訪ねて～	若月元樹	13P
新人紹介	室戸基地 田中優衣	15P
寄付、SNS、Seaturtle goods shop		16P
STSmembers募集中! & STSmembers更新手続きについて		17P
編集後記		

「産まれた直後から」

国立研究開発法人水産研究・教育機構 国際水産資源研究所 岡本 慶

これから多くの試練が待ち受けている冒険の始まりです——。

自然番組などでウミガメが取り上げられる時、このようなナレーションとともに、砂浜をよちよち懸命に歩く子ガメたちの姿が映像として流れるシーンを目にするのが少なくない。

しかし、実はこの海に向かう前にも、すでにたくさんの試練を乗り越えている。そう、母ガメにより卵として産まれたその瞬間から。砂の中に産み落とされた卵は、種や砂の中で経験する温度などによっても異なるが、だいたい50～70日ほどかけて発生し、子ガメになる。その間、砂の中の温度が低くなりすぎたり、逆に高くなりすぎることもある。大雨などによって水没したり、波をかぶることや台風などの高波によって砂ごと流されることもある。こうした自然災害による試練もあれば、敵に襲われることもある。

ウミガメはどの種も、産み落とされてからふ化し、海へ到達するまでの間たくさんの敵に狙われている。タヌキ、イノシシ、イタチ、アライグマ、キツネ、イヌ、ネコ、ネズミ、スナガニ、ヘビ、オオトカゲ、サギ、カラス、コガネムシ、アリ・・・と哺乳類から昆虫まで挙げればキリがないほどの動物が、陸上でウミガメを捕食している。これらの動物たちが、ウミガメたちに与える影響は、場所や年、捕食者が何であるかによって大きく異なるが、哺乳類やスナガニが主な捕食者となっている場合、特に多くの個体が犠牲になることが多い。例えば、アメリカ合衆国東海岸のフロリダではアライグマやアルマジロがアカウミガメ、アオウミガメ、オサガメを、オーストラリア東海岸では移入されたアカギツネがアカウミガメとアオウミガメを、小笠原諸島などの日本を含む世界各地でアオウミガメを中心にさまざまな種をそれぞれ捕食し、大きな影響を及ぼしている。また、近年、奄美

大島や西表島など南西諸島の島々でリュウキュウイノシシによって、多くのアオウミガメの産卵巣が捕食されている。

こうした哺乳類による捕食に対しては、産卵巣の上部をかごで覆ったり、周辺に電気柵を張ったりすることで産卵巣を敵から守る活動がなされている。もし対象となる捕食者が人為的に持ち込まれた動物であれば駆除を試みることもある。しかし、最近報告されたオーストラリアでの研究例では、捕食者であるアカギツネを駆除するよりも、キツネの捕食を妨げるための板状の金網を置くことのほうが、捕食を防ぐのに効果が高かった。ウミガメを敵から守るということだけを考えれば、必ずしも駆除することが最善の方法というわけではないことを示しており、まさに目から鱗だった。

試練を乗り越え、無事ふ化した子ガメたちは、砂からはい出して海に向かうことになる。そして、ここでもこの時を待ってましたと言わんばかりに狙う敵もいる。中米コスタリカ太平洋側の砂浜では、オサガメの子ガメがスナガニのほか、サギやカラカラという猛禽類などの鳥類に襲われているほか、別の砂浜ではイグアナの仲間もヒメウミガメの敵となっている。子ガメの敵は砂浜の上だけとは限らない。海に入ってもなお、たくさんの敵が待ち受けているのである。前号で取り上げた通り、ある程度の大きさまで成長してもたくさんの敵がウミガメを狙っている。となると、その前すなわち海に入った直後にも敵が多いことが想像できるだろう。その代表格は、サメのほか、ターボンやシイラなどの肉食魚とグンカンドリなどの鳥類である。アメリカ合衆国テキサス沖で釣られたシイラの胃から、たくさんのケンブヒメウミガメの子ガメがでてきた事例が新聞記事にされている。このシイラがたまたま子ガメを好んだかもしれないし、たまたまこのシイラがいたところに子ガメが

たくさん集まっていたとも考えられる。しかし、いずれにせよ、肉食魚の中でも表層を主な生息域とする魚にとって、ふ化して海に入ったばかりの子ガメたちは格好の獲物なのだろう。こうした海に入った直後の子ガメたちの敵について調べられた研究もある。フロリダで行われたこの研究では、カヤックで子ガメを15分間追跡し、217頭のうち約5%にあたる11頭がターポンやサメなどに襲われたことを記録した。子ガメが敵に襲われるところを直接観察するのは容易ではない。それでも、こうした並々ならぬ苦労の末の研究や活動があってこそ、ウミガメたちを取り巻く生態が明らかにされたり、その保全に向けたより効果的な対策を取ることができたりするのである。

さて、2回にわたってウミガメの敵について紹介してみても思ったことは、ウミガメにとっては敵であっても、敵にとっては生きるために必要な食糧ということである。ヒトは動物によって食べられることはめったにないが、人生を送る中で、時間などといった違った意味の「敵」と戦っているという点では、われわれも日々多くの試練が待つ冒険を続けていると言えるかもしれない。



図1. スナガニに捕食される仔ガメ(池間氏撮影)



図2. ウミガメ卵を捕食するリュウキュウイノシシ
(琉球大伊澤研、黒島研究所撮影)

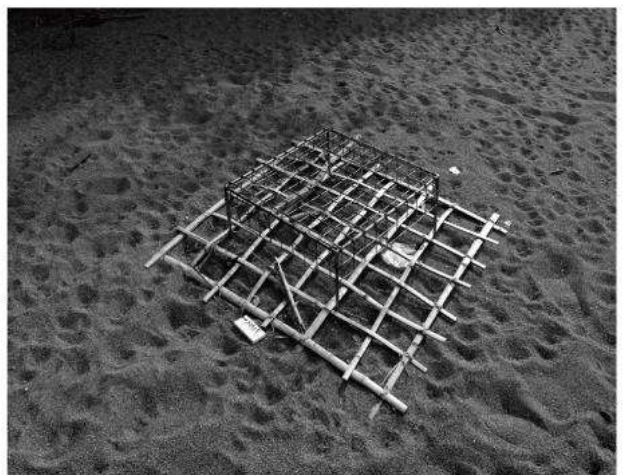


図3. 卵をタヌキから守るために設置された柵
和歌山県みなべにて(松沢慶将氏撮影)

室戸基地研究員 田中 優衣

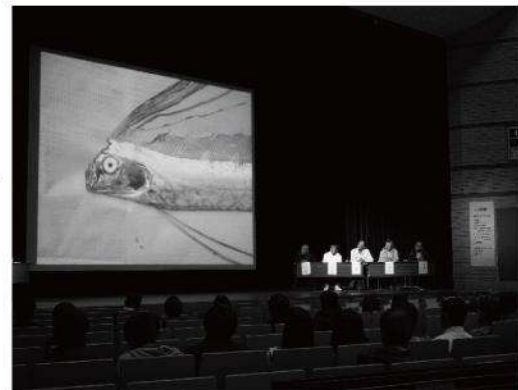
12月9日～11日に高知県室戸市で第27回日本ウミガメ会議 室戸大会が開催されました。3日間で500名もの方々が参加して下さったことを嬉しく思います。

初日は海の駅とろむにおいてウミガメ研修会が行われました。午前の部では室戸市の3つの保育園から33名の園児が参加しました。タンクに入れられたウミガメを園児が囲み、ウミガメが照れてしまうのではないかとと思うくらいの視線を送っていました。園児の可愛らしい声が飛び交う中、若月の紙芝居ならぬ“カメ芝居”が始まると、あっという間に園児は静かになり、カメ芝居に釘付けとなってお話を聞いていました。

ウミガメを放流するときは、みんなが手拍子をしながら「がんばれっ、がんばれ！」と応援する姿がとても可愛らしかったです。午後の部では各地でウミガメ調査を実施している方を対象としたウミガメの身体測定や標識装着の講習を実施しました。みなべ、高知、奄美大島、沖縄本島、黒島の各地域でウミガメの調査をしている方々に講師をしていただき、ウミガメの体のしくみや調査のノウハウなどの貴重な経験談を聞くことができました。



2日目と3日目は、室戸市保健福祉センターにおいて開会式に始まり、四国のセッション、ポスター発表、2016年日本のウミガメ状況の報告、ミニシンポジウム「室戸の海とウミガメ」、口頭発表が行われました。四国のセッションでは、高知と徳島におけるウミガメ保護・調査について7地域の発表がありました。溝渕幸三さんや熊沢桂範さんのような何十年も保護活動をしている重鎮から、高校生の隅野かんなさん、高知大生による若手の報告もありました。ミニシンポジウムでは、漁師さんをはじめとした地元の方々をゲストとして呼びびして、地元の行事の写真・動画を見ながらトークセッションを行いました。定置網でメガマウスやリュウグウノツカイなどの珍しい海洋生物が紛れ込んだこと、室戸ではアカウミガメを食べる文化があることなど、室戸の豊かな自然と文化を知ることができました。とても興味深いお話を聞くことができたミニシンポジウムでしたが、実は…当日まで「登壇するのを辞めようかな」と言っていた漁師さんがいました。室戸の漁師さんはとてもシャイな人が多いのです。何度も懇願して、なんとか登壇していただきましたが、内心ハラハラしていました。



口頭発表では、全国各地で調査・研究を行う学生や研究者から 12 題の報告がありました。中には、千葉県の中학생による一宮海岸でのアカウミガメの調査発表がありました。老若男女を問わず、日々、ウミガメのために活動されている方々の発表はとても勉強になりました。私もウミガメ屋として、ウミガメの調査に精進していこうと改めて強く思いました。

昼食は「むろとの恵みフェスタ」と称して、地域住民の方々に屋台を展開して頂きました。室戸の名物でもある金目鯛を調理したおもてなし汁（キンメ汁）の無料配布には、行列ができていました。懇親会では学生やカメラ屋さんに囲まれて、ブリの刺身などの美味しい料理とお酒を堪能できました。美味しい海の幸が食べられたのも、室戸会議の魅力でした。

ウミガメ会議 室戸大会のご支援とご協力していただいた皆様、ご参加していただいた皆様、本当にありがとうございました。室戸市の多くの方の支えによって、無事にウミガメ会議を終えることができました。次回のウミガメ会議は、2018年2月に国際ウミガメシンポジウムとの同時開催、神戸で行われます。また、皆様にお会いできることを楽しみにしております。



第28回ウミガメ会議は、国際会議と合同になります！

平素より当会の運営にご協力を賜り誠にありがとうございます。次回の日本ウミガメ会議は第38回国際ウミガメシンポジウム（以下、「国際会議」）との合同開催となります。時期や申込み方法等が例年とは異なるので、前号に引続きご案内いたします。

これまで、日本ウミガメ会議は11月か12月の週末に開催し、全国の上陸・産卵等ウミガメ情報のとりまとめ、口頭・ポスター発表、懇親会等を行ってきましたが、今回は下記要領で開催する国際会議期間中の2018年2月19日に「2017年日本のウミガメ（全国のとりのまとめ）」を行い、その他のプログラムは国際会議と合同とします。

申し込み方法・参加費等の詳細は、8月下旬に、ウミガメ速報、ツイッター、ホームページ等でご案内します。本誌次号ではご案内いたしません。インターネット環境のない方は、事務局まで直接お問い合わせください。発表申込と早割料金での参加申込の受付メ切は10月1日の予定です。受付期間が短いのでご注意ください。

国際会議には、海外から400名を超える参加が見込まれます。複数の会場に分かれ、発表は英語で行われますが、講演には英語→日本語の同時通訳を、ポスター会場には通訳ボランティアを配置します。発表を希望の方には講演要旨や原稿・ポスターの英訳をお手伝いします。お気軽に御相談ください。国際会議は、海外のウミガメ関係者と交流し、海外の状況や取り組み、研究成果などに触れるまたとない機会です。皆様是非ともご参加ください。

記

名称：第38回国際ウミガメシンポジウム

主催：国際ウミガメ学会

期日：2018年2月18日—23日

会場：神戸国際会議場（〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-9-1）

早割参加費（予定）：学生14,000円、一般19,500円

立食交流会費（予定）：1,100円 晩餐会費（予定）：5,500円

大会日程（案）：

18日（日）ワークショップ（約10の個別テーマに関する分科会）

19日（月）2017年日本のウミガメ（全国のとりのまとめ）、

その他地域会合（世界中の地域別分科会）、ワークショップ

神戸市立須磨海浜水族園で立食交流会（交流会に先立ち入園観覧可）

20日（火）開会式、基調講演、特別セッション、ポスター発表

21日（水）口頭発表、ポスター発表

22日（木）口頭発表、ポスター発表、ライブオークション

23日（金）口頭発表、国際学会総会、晩餐会&表彰式

以上



松宮 賢佑

ウミガメ協議会事務局長の松宮賢佑と申します。2015 年秋にウミガメ協議会に入局し、2016 年 4 月に事務局長に就任いたしました。協議会に入局して今年で 2 年目のウミガメシーズンを迎えます。当会の調査基地である黒島でもなく室戸でもなく海の見えない大阪の事務局にいる私は、今でも海を見るととてもテンションが上がります。

協議会の松沢会長と出会ったのは、今から 12 年前水族館飼育員を夢見る学生だった頃でした。松沢先生の授業の中で、海洋学や海洋生物の話聞きその中にはもちろんウミガメも出てきました。しかし、当時の私はイルカやアザラシにばかりに興味があり、ウミガメに興味を持つことなく専門学校を卒業し、愛知県にある南知多ビーチランドに入社しました。南知多ビーチランドには現協議会の理事でもある黒柳賢治さんや浅井康行さん、近藤鉄也さんがおられました。浅井さんから「ビーチランドで働かないか」と声をかけていただいたことで、私はアザラシ・セイウチのトレーナーになるという夢を叶えることが出来ました。ペンギンの担当になった時には、近藤さんからペンギンの飼育について教えていただきました。その後、ウミガメの担当になり、学生時代に松沢先生から学んだことを活かす時が来たのですが、それまでウミガメに興味を持つことのなかった私の頭の中には、種類とその違い程度の知識しか残っていませんでした。私はウミガメを一から勉強するために黒柳さんのもと、知多半島での産卵調査や日本ウミガメ会議にも参加しました。そして、ウミガメという動物だけでも、田舎で浜歩きをしているおじいさんから、行政マンや大学の研究者まで、実にさまざまな考え方の人が関わっていることを学びました。学生の時に好きなことだけでなく、チャンスがあればどんなことでも積極的に参加すべきだった、と自分の視野の狭さを痛感したときでした。

ウミガメに関わるうちに松沢会長からのお誘いで、ウミガメ協議会で働くことになりました。現在は事務局の傍ら、動物系専門学校の非常勤講師もしています。授業では、私の失敗をさせないためにも「興味がないことでもメモは取るようにしてください。若いうちは道を決めずに何にでも挑戦するように」と伝えています。

当会には個性的な人が多いので、私は目立たない方かもしれません。でも、そんな私だからこそ、今まで気が付けなかった声を聴くことができるかもしれません。それに私はウミガメと関わる中で、多様な考えが必要だと学びました。これは人間関係や組織においても同じことではないでしょうか。私はフィールドでの経験値が少なく、洒落の利いた面白いことも言えませんが、全国のウミガメ屋の皆様の活動に貢献できるよう努めていきたいと考えています。

琉球大学ウミガメ研究会の紹介

九代目会長 吉田 拓海

こんにちは。琉球大学ウミガメ研究会ちゅうらがーみーの吉田拓海と申します。2010年に設立された全国のウミガメサークルの中では新しい研究会です。現在29名が所属しています。生物専攻の学生だけでなく、ウミガメに魅了された様々な学科のメンバーで構成されています。主な活動は、産卵調査、混獲調査、ストランディング調査の3つです。それでは、私たちの活動を紹介させていただきます。

●産卵調査

沖縄島南部の百名ビーチとサザンリンクスの2つの浜は、設立当初から調査している私たちの調査地の中でももっとも歴史があります。年間の産卵数は、アカウミガメが10回ほどです。この他に、近年は小林茂夫さんの指導のもと、大度海岸で夜間に上陸した母ガメの調査も始めました。

沖縄島北部は「やんばる」とも呼ばれ、本島で最も自然が残っている場所です。ウミガメの産卵も多く、アカウミガメとアオウミガメを含めて毎年数百回の産卵があります。ここでは嘉陽宗幸さんが以前から調査されており、私たちも週に1回同行しています。嘉陽さんはウミガメの卵を見つける達人で、どんな痕跡でもすぐに卵を発見します。それに、ウミガメのことだけでなく磯に生息している生物に関することやフィールドを歩くときの注意など様々なことを教えて頂きます。上陸痕跡が多くメンバー全員が卵の探索をできるため、最初に調査技術を学ぶ修行の場となっています。

座間味島では座間味ウミガメ会の皆さんと協力し、16か所の砂浜を調査しています。座間味島はアオウミガメの産卵がとて多く、その上、離島なので月1・2回しか訪れることができません。一度に30カ所以上の上陸痕跡から産卵巣を探さないとはいけません。嘉陽さんから学んだ技術を発揮し、いかに効率よく正確に卵を見つけることができるのか、自分たちを試すときです。新生子が初めて参加すると真っ黒く焼け、どこかたくましく成長して帰ってくるため、その姿を見ることが上級生の楽しみでもあります。

●定置網に混獲されるウミガメの調査

都屋漁協組合に協力していただき、週に1・2回漁船に同乗し定置網で混獲されたウミガメの調査をしています。アカウミガメは春に、アオウミガメは一年を通じて毎日のように混獲されます。この混獲されたウミガメを計測・標識放流することで、ウミガメの生活史、回遊経路を明らかにしています。ウミガメ調査以外にも、定置網を引いたり、魚を仕分けし競りを見学したりと、とても貴重な経験ができる場所です。海人さんからオサガメやホホジロザメなど極稀に混獲される生物の話をついたり、水揚げされた新鮮な魚を頂いたり、他にはないコミュニケーションも魅力です。

●ストランディング調査

行政、美ら海水族館、日本ウミガメ協議会から情報をいただき現地に飛んでいます。ほとんどが死体として漂着するため、唯一解剖ができる機会です。胃内容物のチェックや肉片を採取など、他の調査では入手できない情報があります。ウミガメの死体は腐ってガスがたまっていますし、大きな動物を解剖するのは人によって好みが分かります。いつもストランディングの魅力に引きこまれた者が率先して解剖を行い、解剖が苦手な者は埋没用の穴を熱心に掘ります。臭い、汚い、重労働の3悪ですが、私たちの中では人気の調査です。

美ら海水族館では河津勲さんのご好意で、ウミガメ飼育のアルバイトや放流会のスタッフとしてお手伝いしています。ウミガメと触れ合うだけでなく、飼育員の方々からお話を伺えます。放流会では、どのようにすればわかり易く伝えられるか、を考えさせられます。ちゅらがーミーが創設されて7年がたち調査内容も充実してきました。一方で、自分たちの調査ばかりで、情報発信をしていませんでした。これからは教育活動にも力を入れていきたいと考えています。

私たちのフィールドにはウミガメがとても身近に存在しています。そして、小林さん、米須さん、嘉陽さんら現地調査のエキスパート、美ら海水族館の方々、都屋漁業の海人の方々など、私たちが応援してくれる人がいます。この恵まれた環境を活かして、今後とも精いっぱい取り組むので、どうかよろしくお願いたします。



嘉陽さんから指導を受ける



都屋定置の作業



美ら海水族館のイベントを手伝う

宮崎野生動物研究会の活動紹介

岩切 康二

宮崎野生動物研究会は、1973年に宮崎市一ツ葉海岸においてアカウミガメの生態調査を開始し、それ以降、約45年にわたりウミガメ調査を継続して行っています。調査箇所は、宮崎県中央部の日向灘に面した地域で、宮崎市、新富町、高鍋町の1市2町、北から堀之内、新富北、新富南、一ツ瀬南、大炊田、明神山、住吉、一ツ葉、人工ビーチ、大淀川、空港北、松崎、運動公園、こどものくに、青島、白浜の16海岸、距離にして約28kmになります。これらの海岸のほとんどは、ウミガメ産卵地として宮崎県及び宮崎市の天然記念物に指定されています。

現在、私達が行っているウミガメに関する活動は、上陸産卵数調査、計測標識調査、流出のおそれのある卵の移植保護、孵化状況調査、海岸の清掃活動、ウミガメに関する教育普及活動等です。これらの活動は当研究会に参加している会員により行われています。1976年に会則を定め正式に任意団体として発足して、2005年にNPO法人化しました。その活動は、今でもボランティアベースで参加しているウミガメ好きのメンバーに支えられており、忙しい仕事の合間を縫って会員はウミガメ調査に駆けつけています。本研究会の特徴は、様々な職種のメンバーが参加して調査を行っていることです。2016年の調査メンバーを見ても、小・中・高・大教員、動物園飼育員、IT技術者、学生、獣医師、環境コンサル、主婦、行政職員など多種多様で、10代から80代まで、異業種のメンバーがカメのために夜な夜な海岸に集まり（家族に呆れられながらも…）、協力して調査を行っています。

次に私達が調査を行っている海岸の様子を少し紹介します。宮崎市周辺の海岸は、調査を開始した1970年代にはどこの海岸も砂浜の幅が50m～100m近くありました。かつてはこの広い砂浜で地域の運動会やレクリエーションも行われていたそうです。その後、宮崎市の海岸を中心に急激に砂浜が痩せ始め、現在は、護岸や養浜によりかろうじてウミガメの産卵環境が保たれている状況です。実際、私が研究会の活動に参加したのは2001年からなので、1970年代の広大な砂浜を実際に見たことはありませんが、2001年以降だけを見ても年々砂浜は後退し続け、砂浜の状況は悪化の一途をたどっています。現在は、国の直轄事業によりサンドバックや養浜による海岸の整備が行われていますが、当研究会はいつも、ウミガメが上陸産卵することができる海岸を目指して、ウミガメ目線で事業に協力しています。



大炊田海岸のサンドバック
侵食対策の効果は出ているがウミガメに対してはまだ課題がある

全国どの研究団体も同じような状況かもしれませんが、当研究会でも調査員の高齢化や人材不足が顕在化しています。今はまだ、シルバーパワー（失礼!）に頼ってばかりですが、次世代の育成が急務です。また、宮崎大学野生動物研究会（WILA=Wildlife Association）の若い力も借りていますが、彼らは卒業後に県外（ウミガメ圏外?）に行ってしまうのが玉に瑕。これからも、誰もが参加できる調査体制を整えて、1973年より続く調査・保護活動を、ウミガメが宮崎に来る限り継続していきたいと考えています。



会の発展に尽力された児玉前事務局長
（写真左：2012年に急逝された）



離岸堤の間から上陸したアカウミガメの足跡（一ツ葉海岸）



宮崎野生動物研究会 集合写真

もしもし亀屋さん♪ 亀屋さんよー♪ ～近藤康男さんを訪ねて～

黒品研究所 若月 元樹

一昨年、徳島県的美波町のうみがめ博物館カレッタの 30 周年の記念イベントに顔を出しました。そこで近藤さんの教え子の女性から、当時のエピソードを伺いました。その内容もさることながら、輝きに満ちた表情で話す姿に、近藤さんからじっくりと当時の事を聞きたいと胃に感じ、阿南市の近藤さん宅を訪ねたのでした。

近藤さんは徳島県海部郡の現在では美波町に属する志和岐浦で生まれました。その頃は、ウミガメに関しては地元の漁師からウミガメは神様だといって大切にしていたり、理科室に双頭の子亀の液浸標本があったのを記憶している程度だったそうです。大人になって理科教師として日和佐中に着任した頃、戦後の引き揚げ者も多く、食糧を生み出す畑は「宝」として重宝されていました。化学肥料もない当時は、大阪から肥船（こえぶね）で人糞を購入していたそうです。当然、畑をつぶして学校を造るという選択はなく、学校は畑の無い海辺の近くに建てられました。それがすべての始まりだったのかも知れません。「自由ではあったが、何もなかった。校舎も半分しかなかった。教員も足りなかった」とおっしゃる通り、理科の他にも英語と社会を教えていたそうです。着任 2 年目、学校そばの海岸でウミガメの死骸を発見したことから、生徒らとウミガメの研究がスタートしました。まずは、日和佐の砂浜から卵を持ってきた卵をふ化させ、生徒たちと試行錯誤で飼育を始めました。餌は漁港で捨てられている魚を利用しました。魚がなくても「生徒の 3 人に 1 人は親が漁師だったから、家から魚を持ってきてもらった」そうです。干物は水に浸して塩分を抜いて与えていたとか。ふ化したウミガメはどんどん成長し、すぐにタライに入らなくなり、校長が調達してきたタンクにも入らなくなりました。学校はどんどんウミガメで有名となり、近隣から列車で小学校が遠足で来たり、役場も来客を連れてきたりするようになりました。そして、周囲の後押しによって、最終的には屋根付きの飼育用のプールが出来上がりました。

当時の活動記録は近藤康男著「アカウミガメ」（1968 年）にまとめられています。社会人になった教え子たちから提案があり、押入れから風呂敷に包まれていた当時の記録を出したそうです。「すっかり忘れていたし、あの程度のことはとくに世界中でやられていると思った」そうです。私自身も初めて『アカウミガメ』を読んだ時も感服しましたが、今あらためて読み返しても徹底した調査と努力量、熱意詰まった一冊に重みを感じます。さらに、近藤さんは「当時の人々は自然を開発して工場から煙が出てても大気が拡散、排水は海水が拡散すると信じ、雇用が生まれる自然開発に手を叩いて喜んだ。私も保護思想は持っていなかった」と振り返ります。

80 歳を超えた教え子たちの活動は続いていました。中心メンバーだった山田輝一さんが主体となって 3 年計画で英訳に取り組んでおり、今年中に仕上がるそうです。約 70 年前の日和佐中学校の活動は、色褪せるところか更に進歩していました。来年、神戸で開催される国際ウミガメシンポジウムを意識していなかったそうですが、良いタイミングです。近藤さんや教え子の皆さんの取り組みから学ぶべきことは多く、まさに亀の甲より年の劫。若き日の近藤さんのように、私たちは子どもたちの発見や好奇心をどこまで尊重し、応えられるのでしょうか。

奥様によると、学校が休みの日には家に生徒さんが遊びに来ていたそうです。当時の給与では高価だったお菓子が買えず、カボチャなどを生徒の口に合うよう工夫して出したそうです。今回、室戸に常駐している田中優衣と訪問させて頂きましたが、栄養過多の我々の図体からか、次から次へと食べ物を出して頂き、お土産に持たせて下さいました。近藤さん宅を出たあとの我々は心だけではなく、胃袋も満たされていたのです。



海亀飼育 主なる研究内容 Main Subjects	研究員氏名 Member Name	飼育及び の形態 Progress
1. 親亀の産卵と気象との関係について	山田輝一 馬場信夫 嵐寿徳 以上3名	科学部の中に 海亀研究グル ープができた。
2. 孵化温度と湿度について	Kiichi Yamada, Nobuo Baba & Toshinori Arashi	In our science club, a small team to study sea-turtle was formed for the first time.
3. 産卵点、コース及び砂質について		
4. 産卵行動の調査		
1. Relationship between egg-laying and weather		
2. Hatching temperature and moisture		
3. Location of egg-laying nest, traveling course		

現在英訳の作業をすすめている『アカウミガメ』の原稿

室戸調査員になって

田中 優衣

『22歳 動物に関わる仕事に就く。』中学の卒業文集の未来予想図に書いてありました。現在 23 歳の私は、日本ウミガメ協議会室戸基地の調査員として働いています。

小学 2 年生の時に、動物好きの友人と親しくなったことがきっかけで、地元の名古屋港水族館と南知多ビーチランドによく足を運んでいました。丸々としたアザラシ、イソギンチャクからひょっこり顔を出すクマノミ、心を落ち着かせる青く透明感のある水…、なぜか幸せな気分させてくれるこの空間の虜となったのです。東海大学に入学後、水族館への就職を目指してボランティア活動や実習に打ち込む中、友人の紹介で黒島研究所に研修しました。そして、若月所長の「室戸に行ってください!」の一言で、大学を卒業した後、高知県室戸市に向かいました。

室戸基地では定置網で混獲されたウミガメの調査が行われていると聞き、ウミガメに会えるのを楽しみにしていました。そんな私を待っていたのは、海が荒れて漁に行けない日々でした。まるで私が嵐を呼びこんだよう…、申し訳ない気持ちになりましたが、漁師さんは豪勢な料理を用意して歓迎してくれました。「マンボウの味噌煮、食べ〜。無理せずにビール飲みよ〜」と優しい声をかけてくれました。強風がおさまって漁が再開されると、多い日では 1 つの漁港で 8 頭もウミガメが混獲されて驚きました。クジラやリュウグウノツカイが捕れる日もあり、海の生き物に触れたり、見たり、食べることができる素敵な場所だと思いました。しかし、漁師さんはこの生活が当たり前で特別には感じないために、私が騙されて田舎に来たのではないかと思っていたそうです。でも、きっと私と同じように室戸を素敵な場所と思える人はたくさんいると思います。これからはウミガメをはじめとした海洋生物の調査に取り組むとともに、その情報を発信していき、多くの人が室戸に行こうと思うきっかけを作りたいと考えています。

室戸にきてから 1 年が経ち、地元の消防分団に入団するなど、馴染めていくことに嬉しく思う反面、「ダルマ! 全然、ビールの飲みが足りんな」と厳しい愛情表現が増えてきました、当初の優しい声は何処へ? また、ウミガメをタンクから引き上げて運ぶ姿を見られたときは、「こんな奴と結婚したくないわ!」と言われる始末。でも言わせて欲しい。未来予想図には『27歳 結婚する』と書かれています!



有福美香、池村茂、和泉正子、一般財団法人H2Oサンタ、小野悦子、金井澄、株式会社みや、神谷元彦、朽見健一郎、公益財団法人パブリックリソース財団、小林茂夫、米須邦雄、近藤康男、四国コココーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、清水すみゑ、清水智之、シャディ株式会社、玉岡昇治、橋爪真璃子、長谷川久美子、はまゆう奥山いさお、藤野英輔、ホテル日航アリビラ、前田直美、南知多ビーチランド、森田泰行、ヤフー株式会社、山田美千恵、渡辺ゆみ子、和田素子(五十音順、敬称略)

この他にも、黒島研究所、室戸基地、みなべ調査基地に募金&差し入れをして頂いた皆さま、本当にありがとうございました。

当会公式 Facebook & Twitter 始めました!!



ウミガメ協議会公式のFacebookとTwitterが始動しました！各調査基地の近況や海の生き物情報をアップしていきたいと思います。ユーザーの皆さま、ぜひフォローをお願い致します！当会のHPトップでもご覧になれます。

Facebookページ 〈 <https://www.facebook.com/umigame.official/> 〉

Twitterページ 〈 https://twitter.com/umigame_info 〉

黒島研究所Twitterページ 〈 <https://twitter.com/kuroshimarc> 〉

Seaturtle goods shop

当会のオリジナルグッズも販売している Seaturtle goods shop がリニューアルオープンしました！会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは各種クレジット、銀行振込、楽天銀行等からお選びいただけます。

アクセスはこちら！
<http://seaturtle.shop-pro.jp>



人気商品！！
当会オリジナル
ステッカー
300円



STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし
 年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円
 特別会員100,000円
 会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌



STSmembers更新手続きについて

会員更新の書類は会員期限終了月に送付させていただきます。会員の皆様のご支援で、ウミガメやそれを取り巻く環境を保全していくことができます。更新月を迎えられる会員の皆様は、是非とも更新して頂ければ幸いです。今後とも当会をよろしく願い致します。なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。※学生会員制度2015年度をもって終了しました。



編集後記

MT23号は如何でしたでしょうか。将来を担う大学生らの活動から、大御所である近藤先生の話まで含めてみました。ちなみに表紙の絵は4才の女の子が書いてくれました。私たちの新職員2名も紹介させていただきました。海亀はいつの時代でも私たちを惹きつけ、それに関わる世代も交代していくのだな、と原稿を読みながら思っていました。さて、来年は国際ウミガメシンポジウムが神戸であります。石橋を叩いて壊すほど慎重な松沢会長の基で進んでいるため、なかなか進捗をお伝えできず申し訳ありません。でも、会長の日本のウミガメ屋のために成功させようという気持ちは人一倍強く、また関係者の誰もが同じ気持ちです。今後ともSTS会員の皆様の温かいご支援をどうか宜しくお願いします。

黒島研究所: 亀田 和成



マリンタートル(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2017年 6月 1日
 発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
 電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535
 URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org